桜林

小山清

青空文庫

私は浅草の新吉原で生れた。生家は廓くるわのはずれの俗に水道尻という処に在った。大門から仲の町を一直線に水道尻に抜けて検査場（吉原病院）につきあたると、左がわに弁財天を祀まつった池のある公園がある。土地の人は花園と呼んでいるが、その公園の際に私の家は在った。新吉原花園、そんな所書で私の家に音信のあつたのを覚えている。子供の私たちは其処をまた「桜林さくらばやし」と呼び馴染なじんで、自分たちの領分のように心得ていた。事実桜林は私たちのチルドレンス・コウナアであつた。

聞くところによると、明治四十三年の夏の水害と翌年春の大火とは、吉原とその界隈かいわいの町の有様を一変させたと云うが、私は

ちようどその大火のあつた年の秋に生れた。物心がついてまもなくあの大地震があつた。震災は私たち東京人の生活に一時期を画したが、私としても自分の少年の日は震災と共に失われたという感が深い。

震災後の吉原はまつたく昔せきじつ日の倂おもかげを失つて、慣しきたり例の廃止されることも多く、昔しのを偲しのぶよすがとしてはなかつた。公園もきれいに地均じならしをされて、吉原病院の医師や看護婦のテニス場と化してしまつた。私たちがそこを桜林と呼んだのも、桜樹が沢山植えてあつて、季節には仲の町に移し植えられて、所いわゆる謂夜桜の光景を見せたからである。公園と云うよりは桜林と呼ぶ方がふさわしかったのである。草深くて、ささやかながら私たち町っ子の渴かつを癒いや

すに足るだけの「自然」がそこにはあった。池の面も南京藻がいっぱい浮かんでいて、ちよつと雨が降ればすぐ水が溢れた。私の子供の時分にも小さい出水でみずは毎年あった。私自身溺れおぼかけたこともあり、また休暇に遊びに来た兵隊さんが誤つて池に墮おち遂に帽子を発見出来なかつたという話もある。夏ともなれば私たちは草いきれを嗅いでとんぼ採りに寧ねいじつ日ひがなかつた。桜林と廓外との境には丈の高い木柵がめぐらしてあつた。柵の向うは廓外のしもたやの縁先になつていて、葡萄柵ぶどうだなやへちまの柵があつて、柵には朝顔の蔓つるなんか絡からみついていて、私たちは朝まだき、露で下駄を濡らしては、よく朝顔の花を盗つてきたものだ。私の家はちようど桜林の入口のところにあつたので、二階の窓から上野の山

や浅草公園の十二階が見えた。おそらく晴天の日には遠く富士も見えたような気もするが、はつきり記憶には残っていない。低い土地であったから、むかしの錦にしきえ絵に見るようなわけには行かなかったかも知れない。

私の家はもと京町二丁目で兼東という名で貸座敷業を営んでいたが、祖父の代に店を人に譲った。祖父は二さんぎ一業取締の役員もしていたようで、二六にろくしんぼう新報の計画した娼妓しょうぎ自由廃業の運動の際にも、また救世軍きゆうせいぐんがその遊説の太鼓たいこを廓内にまで持ち込んだ時にも、間に立って調停の役を勤めたとかいう話である。

私の子供の時分、家でいちばん威張っていたのはこの祖父であった。母屋から渡り廊下のついている離れおきふしに起臥していたが、

そこから家内中に号令していた。お山の大将のようなものであつた。祖母などはかげでは祖父のことを「うちの代官だいかんさま」と云つていた。家長は父であつたが、父は目が見えなかつたし、そのうえおとなしい人であつたから、隠居である祖父の威勢が家内中を圧していたのである。父は義太夫ぎだゆうの師匠をしていた。蔵の二階が父の稽古場になつていて、たいていそこに閉じ籠こもつていた。祖父は俗に云うこわもてのする人柄で、口くちやかま喧かましいわりには、出入りの者や女中なんかの気受けは悪くなかつた。大根おおねの気性がさっぱりしていたからであらう。なにかというとすぐ「馬鹿野郎。」と大喝だいかつ一聲いっせいした。祖父はたいへん毛深かみそりいたちで、とりわけてひげが濃かみそりかつた。すこし剃かみそり刀を怠ると恐い顔になる。髭くちひ、髯ほおひげ、

鬚あごひげ、まるで銀の針金を植えつけたようで、なんのことはない神しんれ
靈いやくちのわたし 矢口渡の 頓兵衛を見るようであつた。叢くさむらの中からぬつと
迫せり出して来て笠を撥はね除のけ、脇わきざし差さを抜いて見得を切るあの顔
そつくり。その顔で癩かんしやくだま癩しやくだま玉を破裂させるのだから、たいがい
の者がぴりぴりした。家で祖父から「馬鹿野郎。」を云われな
つたのは父だけである。父に対してはたいへんやさしかつた。

私も祖父から一いっかつ喝かつをくらつて縮みあがつた覚えがある。小学
校の三年生のとき、貯蓄奨励の意味でポストの恰好をした貯金箱
を実費で購入して生徒に頒わけてくれるという企くわだてがあつた。若しか
したら玩具屋の宣伝であつたかも知れない。ポストのおもちやは
赤い色で美しく塗装されていて、私たちの眼にはひどく誘惑ゆうわくてき的

に映った。希望者だけに頒けるので、べつに無理に購入しなくてもよかつたのだが、私は家に帰ってから母にしつこくせがんだ。

「勤^{きんけん}儉貯蓄^{ちゆく}なんだから。」ということを私はくりかえした。す

ると偶々^{たまたま}その場にいた祖父が、「馬鹿野郎。子供のくせに、い

まから金をためることなんか覚えて、どうするんだ。」と百雷の

轟^{とどろ}くような声を出した。私は面皮^{めんぴ}を剥^はがれた偽善者^{ごぜんしや}のように竦^{すく}ん

でしまった。また帮^{ほう}間^{かん}の喜与作^{きよとさく}さんの家に遊びに行つて、「い

ちやついて、どんとひじ鉄砲^{てつぽう}くらりや、みこみがないとね。」と

いうへんな文句^{ぶんこう}を覚えてきて、家に帰つてから得意^{とくい}になつて披露^{ひろう}

していたら、そのときもやはり「この馬鹿野郎。」と怒鳴^{どな}られた。

それでも私は祖父のお氣^{いき}にいりであつた。ひとつは父が不自由

なからだ軀であつたせいであろうが、いわば私はお祖父さん子というよ
うなものであつた。湯にもよくいっしょに入った。私が桜林で遊
んでいるようなときでも、「御隠居さんが呼んでいますよ。」と
云つて女中のなかやが迎えにくることがあつた。祖父は熱い湯が
好きであつた。私が我慢できなくて出ようとすると、祖父はきま
つて「百勘定してから。」と云う。私は早口で百までとな唱えると、
軀中から湯氣を立てて湯船から飛び出す。私は心得ていて、欲し
いものがあると、よくこの入浴中に祖父にねだつた。祖父はたい
てい聞き入れてくれて、母にそう云うか、また自分で都合してく
れた。祖父の左の二の腕に桃の実の小さい刺いれずみ青のあつたのを覚
えている。骨董道こつどうどうらく楽で、離れの床の間には蒐集しゅうしゅうひん品がご

たごた置いてあつた。名の無い画描きの人の、その面倒を見てや
つたらしく、出入りするのがいた。その人のきつきゆうじよ鞠躬如とした姿
が私の記憶にも残っている。そういう祖父は器用なたちで、私の
ために木片きざれに船を彫つたり、また竹細工に渋紙を張つたりして飛
行機の模型などを造つてくれたりした。

助ちゃんも祖父のお気にいりであつた。助ちゃんは父の義太夫
の弟子であつたが、私の思い出の中ではその人の印象は祖父の記
憶と二重になつて残っている。ちゃんとした芸名がなかつたわけ
でもないであろうが、誰もが単に助ちゃんとかばかり呼んでいた。
祖父はまた「助公、助公。」と呼び捨てにしていた。年頃は二十
五、六であつたが、如何にも年寄り臭い顔つきをしていた。その

頃新派の活動役者の三枚目に小泉嘉輔こいずみよしすけというのがいて、車くるま輓ひきや屑屋の役を得意にしていたが、助ちゃんはそれによく似ていた。まだ独りもので、馬道に住んでいる良助という義太夫専門の箱屋の家に二階借りをしている、そこから毎日父の許もとに稽古に通つてきていた。収入と云つては出稽古が二とこばかりとたまに寄席よせに出る位のものであつたから、貧しい暮しは知れていた。祖父はこの助ちゃんになにかと目をかけていた。馬道うまみちに祖父の鼻ひいき眞まにしてゐる鮫屋すしやがあつたところから、よく助ちゃんに頼んで稽古にくるついでに買つてきてもらつたりしていた。祖父が「助公。」と呼ぶと、助ちゃんの爺くさい顔が皺しわだらけになつた。助ちゃんについてはこんな話がある。向島の小梅にいた頃、寒か

んごえ

声を練るため、夜半物干台に出ておさらいをしていたところ裏隣りの家の窓が開いていきなり「氣違い。」と怒鳴どなられた。勿論助ちちゃんは憤ふんぜん然とした。翌日風呂屋でその声の主である高等学校の学生と顔を合わせたとき、あなたも勉強が大切なら、それは私も同じこと、ものを学ぶ道に二つはないと云つて、相手に謝罪させたということである。助ちちゃんにはそんなすつとんきようなところがあつた。またこんな話もある。弁天さまの池に若い芸者が身投げをしたことがあつた。その妓こは仲の町のある家の抱えであつたが、さつぱりお座敷がなくて姐さんや朋輩からも冷遇されていたが、ついにわが身を果敢はかな無んで死を拵えらんだ。おとなしいというよりは陰気で、向い合つているとどうにも氣詰りで、あれで

はお座敷のないのがあたりまえ。ふだんも気の毒なほどいじけていた。器量は悪い方ではなかったが。——この話を聞いて助ちゃんはひどく同情したそうで、「可哀そうなことをした。あたしがひいき鼻^{ひいき}眞にしてやるんだつたのに。」とまじめな顔をして云つたので、みんな嘖き出して、祖父が笑いながら「助公。お前身につまされるんじやねえのか。」と云つたら、「へえ、凶星です。」と云つたという。

助ちゃんは私の父の許に来る前に、二、三ほかのお師匠さんの門をくぐっていた。あるとき祖母が「お祖父さんも物好きだよ。助ちゃんのどこが気に入つたのかねえ。」と云つたのを耳にして、祖父は「馬鹿野郎。助公はおれの大事なお得意だ。」と云つた。

いまにして思えば、あの画描きの人のことで、誰かが祖母と同じような問いをしたならば、祖父は同じく「おれのお得意だ。」と答えたことであろう。祖父はときどきそのお得意のために散財をしていた。

私の父は二つのときに失明したという。祖父は父のために凶つて義太夫を習わせた。十三、四の頃大阪へ修業に行き、初め五世野沢吉兵衛の手解てほどきを受け、その後、後の撰津せつづ大掾だいじょうの弟子になつた。大阪へは祖父の姉で出戻りの身をそのまま家に寄食していた人が伴いて行つた。家では祖母と区別するために、この人のことを大阪おばあさんと呼んでいた。父は時々学生の帰省するように東京の家へ帰つてきては、また大阪へ出向いていたようであ

る。その間に父は結婚して、私もいちど二つのときに父母に連れられて大阪へ行つたことがあるが、その後の下阪げはんの際には東京の祖父母の許に残つた。父はそのときを最後に文楽ぶんらくを退いたが、その間三年というものは大阪に居着いて東京へは帰らなかつた。祖父の愛が私に加わつたのも、また父は別にして母までが私のことで祖父に対して遠慮氣の見えたのも、ひとつはそういう事情のせいであろう。

ごく幼い頃の思い出だが、私は夜の明け方ごろになると、隣りの父の寢床に這い込んでいって、よく父に「お話して、お話して。」とねだつたものだ。すると父はいつでも「うん。よしよし。」と云つて、私の毬栗頭いがりあたまを抱いて、寄席よせで聞いてきた落語

や講釈の話をしてきかせてくれた。私の記憶には父の話し振りがなかなかユウモラスな上手なものとして残っている。父はまた自分から畳の上に仰向けになって、揃えた足の裏を私の帯の前において、私に手足を泳がさせては亀の子の真似をさせたりした。また自分の背に私を後向きに背負って、「千手観音だ。」と云つて冗談をしたりした。幼い私は父の背で「千手観音、拜んでおくれ。」などと云つたりした。私はこの遊びが好きで、よく父にせがんだものであった。父はふだんは陰気で黙りがちであつたが、そんな時には巧まないひょういつ瓢逸ひょういつなどところが見られた。若しも父が並の軀であつたなら、父のこういうひととなり為人はもつと外部にあらわれて、広く暖く家庭を包んだことであつたらう。

祖父は聡明そうめいな人ではあつたけれど、私の強い嫌いが無いわけでもなかつた。

おそらく父は自分の意志で事を極めたことはなかつたに違いない。一家の主としても父親としても、自分から配慮するということがなく、常に人から配慮される側の人であつた。世間に出て人に立ち交つたことがないばかりか、自分の息子がどんな顔をしているのかさえ知ることが出来なかつたのだから。

父はときどき大阪おばあさんに連れられては寄席などに出かけていた。この人は太棹ふとしざおは女としてはかなりのてだれであつた。そうだが、私が物心がついた頃には、もう耄碌もうろくしていてみんなから侮あなどられていた。私が十のときに寄る年波で亡くなつた。思えば

この人は父の守りをするためにこの世の中へ生れてきたような人であつた。

私は子供のときはひどいにかみやで、人見知りばかりしてゐた。戸外で活潑に遊んでいる友達の仲間入りがなかなか出来なかつた。学校へ行くようになってからも、当座はそのつど送り迎えをしてもらつてゐた。私の周囲にもやはりいじめつ子というものがいた。私はかるいきうつし気鬱症しょうに罹かかつた。祖母は「なんたる懦弱かかだか。」と云つた。祖父は心配して私を清きよ元もとの稽古に通わせるようにした。一種の神経衰弱療法である。祖母はなにもよそへ遣ることはない、うちで義太夫を習わせたらと云つたが、祖父は「馬鹿野郎。清はしょうばい人にするわけじゃない。親父に倅せがれが教わ

るといふのも鬱陶うつとうしいもんだ。」といふようなことを云つた。

母は不賛成のようであつたが、このときも押強くは口に出さなかつた。私は毎日学校から帰つてくると、その頃竜泉寺町に住んでいた延小浜という中年増のお師匠さんの許へ通うようになった。

お師匠さんの家は揚屋町の番屋を抜けてはねばし 橋を渡つて金杉の方

へ行く途中に在つた。この人はごくさつぱりした男のような気性の人で、いつも髪を割かのことというのに結つていた。私が初めておんしゆう

温習ひきてぢやや 会に出て梅の春を語つたときに、連中の仲の町の鶴屋と

いう引出茶屋の主人がお師匠さんと一緒に写真を撮つてくれた。

三味線を控えているお師匠さんの隣りに、紋附を着て袴はかまをはいた

九つばかりの私がひよわな小動物のような眼をして写つていた筈

であるが、震災のときに焼失した。祖父を手古摺てこずらせた私の内気も、三年生になって級長を勤めるようになってからはそれほどもなく、三年生になって、たこあ 凧揚げやとんぼ採りの仲間入りも一人前に出来るようになるばかりか、大川へ水泳ぎにさえ出かけるようになった。

私は浅草の千束町通りにあつた千束小学校へ通つた。その頃廓内から学校通いをするのにはちよつと不便なことがあつた。というのは、ちようどその時刻には検査場裏の裏門も五丁目の非常門も閉まっていたからである。表向き廓外へ出る道は大門口以外にはなかつた。昔は大門から一步でも踏み出すことを「江戸へ行く」と云つたそうで、また仲の町を通行することが既に「道中」であつたが、しかし大正の私たちはそんな悠ゆうちよう長な真似はしてい

れなかつた。私の家では浅草方面へ出抜ける場合は、京町二丁目のはずれの黒助湯という風呂屋のある露地の突当りに在った小林というしもたやの土間を通り抜けさせてもらっていた。その家はちようど廓の外郭に沿って流れているお歯はぐる溝どぶに接していたので、外との往来には便利だったのである。私も通学の際はそのを利用した。朝登校の際にはまだ寝ているらしく戸が閉まっていることもあつた。そんなとき私が戸口をことごとくいわせていると、中からその小母さんが「いま、あけてあげますよ。」と云つて、やがて戸をあけてくれたりした。長い間には迷惑に思ったこともあつたであろう。私の家では月々その家に附つけとどけ届はじめをしていた。

私は通学の際にはたい近い近所に住んでいる肇さんという子と

誘い合わせて行つた。ときには、はじめさんの妹ののぶちゃんも行かなくともあつた。二人とも私の竹馬ちくばの友である。私の家の裏に私の家の持ち家である長屋があつたが、その共同水道からはいちばん遠い位置にある一軒にはじめさんの家族が住んでいた。はじめさんのお父さんは京一の仙州楼の本番口の妓夫ぎふをしていた。お母さんも家で、玩具問屋の注文の風船づくりの内職をして、家計を補っていた。はじめさんと私は家が近かつたばかりでなく同級生であつた。はじめさんはいつも木綿の盲縞の着物を着ていた。そしてその筒つぽの袖口が両方とも、またいつも金きん鷄しよく勲章しやうのようにぴかぴかしていた。はじめさんは子供の間によく見かけるはな洩なたらしの一人で、常にはな紙で拭うよりは早くその両袖を活用

していたからである。大柄で色黒で団十郎のような大眼玉をしていた。口の悪い私の祖母がはじめさんのことをお神楽かぐらに出でくる「宝剣泥坊」のようだと云ったことがある。吉原神社の祭礼のばか踊りに鬼おに瓦がわらのような面をした愛嬌のある物腰のそんな泥坊が出てきたことがあったが、それがはじめさんによく似ていたのである。私がまだ御飯を食べているときに、「清きよちゃん。学校へ行かないか。」と云ってははじめさんが迎えにくることもあれば、私をはじめさんを誘って行くこともある。私をはじめさんの家の前で待っていると、やがてはじめさんとのおぶちゃんが出てくる。のおぶちゃんが私たちと一緒に行ききたそうにすると、はじめさんはいつもその団十郎のような眼玉をぎよろりとさせて、「女はひと

りで行け。」と云う。はじめさんは「おれは当然兄貴の権利で云っているんだぞ。」というような顔をしている。のぶちゃんは恨めしそうな顔をして「兄あにさんの意地悪。」と云って、仕方なさそうに私たちの後からすこし遅れて附いてくる。なんかの具合で私とのぶちゃんちゃんが先へ連れ立って行くようなことがあると、道を歩いている二人のはるか後から、「男と女と豆いり、牛の小便十八町。」とはじめさんが大声で云うのが聞える。振り返って見ると、はじめさんはやけのように草履袋を振り廻している。はじめさんとしてはひどく兄貴の威厳を傷つけられた気持がするのであろう。はじめさんの家では廓外との出入りには、やはり黒助湯の露ろじ地にある炭屋の土間を通行させてもらっていた。そこから炭を買って

いたからであろう。私たちは子供の正直さで、私は小林さんから
はじめさんは炭屋から、それぞれ別々に外に出て往来でまた一緒
になつて学校へ行つた。千束小学校は小松橋の交番の前をすこし
行つたところ、平野という料理屋の並びに在つた。この通りを真
直に行けばやがて浅草の十二階下に出るのである。学校の帰りに
は近道をするために、桜林を囲む木柵を乗り越えて入つてくるこ
ともあつた。そんなとき公園の樹木の面倒を見ている松つあんと
いう植木屋さんに見つかり、「この餓鬼がきツ。」と大喝一声され
た。松つあんは嚇おどかしに云つているのであるが、私たちは鳴子の
音に驚く雀つ子のように、しんから震えて逃げ出したものだ。

のぶちゃんは私たちより一つ年下であつた。稚児ちごまげに結ゆつて

いて、寸の短い着物に前垂まえだれをかけていた。上唇うわくちびるがきもちむくれていて、いつもかすかに口をあけているような感じであつたが、気になるといふほどではなかつた。のぶちゃんは学校から帰ると、私の父の許に義太夫を習いに来ていた。物覚えは悪いらしく、学校の成績もいい方ではなかつたらしいが、稽古の方もはかばかしくなかつたようである。のぶちゃんは私の家に来ると、まず茶の間の長火鉢のそばにいる祖母の許に出精簿のようなものを差し出して、稽古がすむとまた茶の間に寄つて祖母の手から判を捺おした出精簿をもらつて帰る。これはのぶちゃんが時々稽古をなまけることがあるので、のぶちゃんに限つて実施していたことで、私が夏休みに大川の水練場へ通つたときに毎日出精簿に判を捺おし

てもらったところから祖母が思いついたのである。六畳の蔵座敷が母が針仕事などをするとところで、そこに私の机も置いてあった。のぶちゃんも稽古をすませて蔵くらから出てきたときに、偶々たまたまそこに私が居合わせば、きつと机のそばにきた。

「清ちゃん。なにを讀んでいるの？」

私が讀んでいる『少年世界』を見せると、

「あたしもこんどの午うまの日（吉原の縁日）に『少女世界』をかうの。」

「午の日で売っているのは月遅れだよ。」

「でも新しいのは買えないんですもの、清ちゃん、こんどの午の日は一緒に行きましようね。」

「うん。」と上の空で返事をする、それでも嬉しそうに、

「ああ、もう帰ろう。遊んでいると御隠居ごいんきよさんに叱られるから。あたし明日から太十をお稽古するのよ。」

のぶちゃんがそばにいるときはうるさく思うこともあったけれど、去られると物足りない気がした。

お糸さんの話をしよう。お糸さんが私の家に来たのは桜どきで、吉原はちょうど夜桜の頃であった。

吉原の桜は八重咲きが多く、上野や向島よりは遅れて咲いた。花の開く頃になると、馬力ばりきや荷車に附けられて、桜林から仲の町に移された。大門口から水道尻まで、桜のあるところは青竹の欄ら

干かんで囲われ、その囲みの中に朝顔灯籠が点ともし連ねられた。葉桜になつてしばらくすると、また根こぎにされて、桜林へ運ばれるのである。

お糸さんが家へ来る前の日、五十間の平床の親爺さんが祖父のひげを剃りにきた。この親爺さんはいつも抽出ひきだしのついた黒塗りの箱をさげてきた。「御隠居さんのひげはあつしの剃刀でないと刃が立ちません。」と云い云いしていたが、お世辞ではなくて自分の腕を自慢していたのかも知れない。この人の亡くなった父親が平さんと云つて、吉原の名物男の一人であつたが、倅の代になつてからも得意筋からは「平床」の名で最眞もつまにされていたようである。

平床が仕事を終わって帰るときに祖父は、

「御苦労だが、帰りに並なみせん仙せんに寄つて明日来るようにそう云つてくれ。」と託ことづけをした。並仙というのは角町にあつた俵くるまや屋である。

「どこかへお出かけで。」

「麻布あさぶの狸まみ穴あなまで行かなくちやならない。」

「それはまた遠方へ。」

翌日祖父は朝飯をすますとすぐ俵に乗つて「遠方」へ出かけた。この山の手をひどく遠く感ずる習性は、その頃の下町育ちの者でないとはわからないのでないだろうか。五十にて四谷を見たり花の春。まさかそれほどではないにしても、出不精の祖父にしては

めずらしいことであつた。昼すぎになつて祖父は自分のほかにも
う一台俵を連ねて帰つてきた。

私はちようどそのときは六年生になる学年末の休みに當つてい
た。その日戸外で紙芝居を見て家に帰ると、縁側に莫塵ござを敷いて、
母となかやともう一人島田しまだまげ鬻の若い女の人が、神棚や仏壇の真
鍮製の器具を磨きずなでみがいていた。子供というものは、戸外
の遊びからわが家に帰つてくるときは、誰もが息をはずませて駈
け込んでくるものである。私が知らない人がいたので間の悪い顔
をしていると、母よりも早くその人が笑顔を見せて、

「お帰りなさい。」と云つた。私が返事が出来ずにもじもじして
いると、重ねて、「どちらへ行つてらしたの？ 頬つぺたを真赤

にして。」

母がかえりみて、

「また桜林ではじめさんと樹登りをしていたんだろ。桜の枝を折ると松つあんに叱られるよ。」

「ううん。紙芝居を見てきた。」

「また悟空ごくうに八はっかい戒かい？」

「うん。」

その頃廓内に入ってきた辻芸人には、法界節、新しんない内流し、それから宗十郎のこわいろ声色をよくつかうので評判の飴屋などがいたが、そのほかにこの紙芝居なども子供相手とは云つても、やはり芸人には違いなからう。それにやることも当世とはだいぶ趣が違つて

いたし、それを渡世とせいにしていた人の数も、いまに比べるとぐつと少なかったようだから、なにやら箔はくがつくというものである。揚屋町の角の鯉こいまつ松という台屋の横手が興行の場所で、二時頃から夕方にかけて催した。狂言は清水というのが西遊記、高島というのが忍術ものをそれぞれ看板にしていたが、清水の方が人気があった。いまのように厚紙に背景、人物、情景等を一枚の絵にしたのとは違って、人物なども幾様にも切り抜いて、おでんのように竹串をさして、人形を操るように器用に動かした。伴奏の楽器も亦いまのようにハモニカなんかではなくて、流しの声色やと同様に銅鑼どらに拍子木ひょうしぎ。操る人は舞台の蔭に身を隠して声だけしか聞えない。口跡もなかなか渋かった。舞台の前に詰めかけて息

を凝こらしている私たちは、銅鑼がボーンと鳴ると、芝居好きが大薩摩をきくときのように胸をときめかしたものだ。巴パリ里の子供が見世物のグラン・ギニョールに熱狂するようなものであろう。私はこの紙芝居の玩具を一幕一袋五拾銭で西遊記の清水から譲ってもらったが、家に持ち帰って祖父に見せたら、そのとき祖父は人物の線など浮世絵の筆に似ていると云って案外な顔をした。

母はちよつと仕事の手を休めて、私を見てひやかすように、

「この人はね、そりや紙芝居の声色が上手なんですよ。」

「そうですか。ぜひ聞かせて下さいね。」

「うそだい、うそだい。」

「紙芝居の真似もいいけれど、えもんだけ衣紋竹や物差を振り廻して、唐

紙や障しょうじ子に穴をあけるのは御免だよ。」

「穴なんかあけないよ。」

なかやがそばから、

「清ちゃんにあげて下さいって、伊勢新の番頭さんが新しい衣紋竹を沢山届けてきましたよ。」

「うそ云つてらあ。」

形勢が悪くなってきたので、私はその場を退散した。それにさつきからきまりが悪かったのである。縁側を曲がった廊下の突当りに戸棚があつて、それがそのまま私の玩具箱になっていた。そこには私の幼いときからの手遊びの玩具が入つていて、ノアの方はこぶねの乗合のように大混雑を極めていた。震災で失つたものの中

で、当時はそれほどではなくて、その後歳月を経るにつれて惜しい気持のされるものである。おそらくその戸棚の中には私の少年時代の思い出が、いっぱい詰め込まれてあるに違いないのだから。私は戸棚の中に首を突き込んで、探しものをしていている真似をしていたが、べつに目当があるわけではなかった。縁側の話声に気をとられていた。

「おかみさん、花立が一つ見えませんが。」

「そうかい。どうしたんだらうね。いやだよ、なかやの膝の下にあるじゃないか。」

「おやまあ、ほんとに。」

その人の声もまじって笑うのが聞えて、しばらくして母の声が、

「ええ。おかげさまで学校の出来は悪くないんですが、お祖父さんが甘やかすものですから、腕白でこまります。」

「いいえ、いいお子さんですわ。」

私は箱根みやげの寄木細工の玩具をもてあそんでいたが、ひとりで顔が赤くなった。

お糸さんは麻布の狸穴から俵に乗って私の家に来た。お糸さんがどうして私の家に一時身を寄せるようになったのか、私には知れていない。私は子供の気持でなんとなくお糸さんのことを遠い縁つづきの人のように思っていた。祖父は「お糸、お糸。」と呼び捨てにしていた。お糸さんはまた祖父のことを、親しみの籠こもつた口調で「おじさん。」と呼んでいたが、恐い人である祖父がそ

う呼ばれるのが、はたの者の耳にはめずらしく聞えた。

お糸さんは家では玄関脇の四畳半、もと大阪おばあさんのいた部屋に寝起きした。そして家事の手伝いのほかに、いつとはなく父のために、大阪おばあさんのしていた役廻りを引受けるようになった。毎日、新聞の続物よせを読んで聞かせる、稽古の客のために湯茶を運ぶ、ときたま寄席行ともの伴をすることなど。母はと云えば、母はまた家事にかまけてばかりいる人であったから、なかやを相手にいつも忙しそうに立ち働いていた。寛ろぎくろのときはと云えば、針仕事をしているときであった。母のことでは、小岩にいた祖母の身寄りの許から荷車に山積みして送り届けられた漬菜を、物置小屋の土間でなかやを相手に幾つもの大樽おおたるに漬けていた甲斐甲

斐しい姿と、その赤く腫れた指のことが憶い起される。

お糸さんが家にきて間もなく、その頃父の許に稽古にきていた鶴屋の内芸者の小ふじさんが、お糸さんを見かけて、先年歿した

三代目 おのえきくじろう 尾上菊次郎 に似ていると云い出した。菊次郎のファンは

吉原にもだいぶいたようだが、小ふじさんもその一人で、その墓

のある池端七軒町の大正寺にまで出向いて、墓前に香華を手向け

てくるほどの熱心な鼻肩であった。菊次郎のいない二長町は見る

気がしないと云うほどの小ふじさんにしてみれば、たいていの顔

が菊次郎扮するところの三千歳に見えたのかも知れないが、ほか

にも同じことを云う人がいた。吉原の鳶頭のおかみさんで、

家の者はこの人のことを、「ばあちゃん。」と親しく呼び馴染ん

でいた。吉原の鳶職は四番組で、江戸の川柳せんりゆうに「浅草に過ぎたる物が二つあり、蛇じやの目の纏まとい、加藤大留」とある、昔は名にしおう新門辰五郎親分が籍を置いたという、その蛇の目の纏を預っていた。この頭の家で盆に出入り先に配る団扇うちわにその纏の絵のついていたのを私は覚えている。頭は名代なだいのデブ頭にらで睨みの利いた人であったが、おかみさんは「ばあちゃん。」という呼び名でもわかるように、家業柄に似ずおとなしいひとの好きな人であった。ばあちゃんは齒かぐらがお神楽ししの獅子を見るようにずらりと金齒であった。私はいまでも金齒の目立つ人を見ると、このばあちゃんのことを思い出す。住居がやはり水道尻で池の前にあつたので、ときどき私の家にもらい風呂にきては話込んでいった。祖母のいい話

相手に、祖母はこの人と話しながら、ふたこと目には「そうなんだよ、ばあちゃん。」とか「まあお聞きよ、ばあちゃん。」とか云つたりした。「なにごとも時世時節でね。」という述懐めいた言葉が、ばあちゃんの口癖であつた。私はいつもひとり早く寝かすつけられてしまうのだが、ふと目が覚めたときに、茶の間の方から大人たちの話声が聞えてくることがある。そんなときばあちゃん的笑声などを耳にすると、茶の間の雰囲気がばかに楽しそうに思われて、子供をさきへ寝かしておいて、大人たちだけでなにかいいことをしているのではないかしらという気がよくしたものである。ばあちゃんはお糸さんのことを「素人にしておくのは惜しい。」というようなことを云つた。

私もいちど六代目のお祭佐七で菊次郎の小糸を見た記憶があるが、子供のことだから、お糸さんがその人に似ていたかどうかという比較のことになると覚束ない。ただ子供心に綺麗な人に思われたので、お糸さんと一緒に暮すようになったことが嬉しかった。お糸さんが家にきた翌朝、私は起きるとすぐお糸さんを探したが、お糸さんは縁側で顔を洗っている父の介添えかいぞをしていた。父は鼻が悪かったので、洗顔のつどゴム製の洗滌器せんじょうきで鼻を洗うのがきまりであった。家業柄鼻は大事にしなければならなかった。お糸さんは私を見ると、

「お早うございます。」と云つて一寸首をかしげた。

午後のお稽古に出かけようとしているときに、祖母からお糸さ

んを伏見町の二葉屋に案内するように云いつけられた。私はお糸さんと連れ立って家を出た。

「二葉屋へなにしに行くの？」

「お強飯こわあつらを逃えに行くのよ。」

江戸町二丁目の裏通に伏見町という小路がある。二葉屋はそこにある餅菓子屋で、私の家では正月の餅や節句の柏餅をいつもそこに注文していた。

「清ちゃんはお習字のお稽古に行くの？」

「ううん。お師匠さんのところ。」

「お師匠さんって？」

「延小浜さん。」

「そうお。清元なのね。いまなにを習っているの？」

「いまはね、お染。」

京町二丁目の通りを抜けて仲の町の辻に出たとき、いまを盛り
の花の梢こずえの向うに角海老かどえびの大時計を仰いで、お糸さんは山の手の
住人らしく見て過ぎながら、

「ここが角海老ね。」

「そう。お糸さんは吉原なかへ来たことはないの？」

「いいえ。ありますわよ。」

「ぼくの家にも？」

「ええ。清ちゃんかもっと小さかった時分に。ちようどお西とりさま
のときに。」

「ひとりで？」

「いいえ。おっ母さんと一緒に。」

「ぼくがいた？」

「いましたよ。清ちゃんはかすりに黒無地の胴はぎの着物を着ていて、可愛らしかったわ。よく覚えていますよ。いまのおなかさんではない子守さんがいましたね。」

「しづや。」

「そう、おしづさんでしたね。清ちゃんの子守さんは。一緒に大阪へも行ったんでしょ。」

「ええ。」

「おしづさんはいまどうしています？」

「しづやはね、いま新造衆しんぞしゆをしているの。」

しづやはその頃江戸一の徳稻弁したしんの下新したしんをしていた。家はまえから土手向うの山谷堀の近くにあった。

「それじゃ、いまでもときどきお家へ見えるわけね。」

「ええ。」

しづは月に一度位はなんとなく私の家に顔出しに来たものだが、往來でもまたよく行き逢った。しづやが家に来ているとき、私が学校から帰ってきたりすると、祖母や母が「そら、しづやの殿さまが帰ってきた。」とひやかすように云い云いしたものだ。しづやも顔を赤くしたし、私もなんだか照れくさかった。道で逢ったときに「御隠居さんやおかみさんにはないしよですよ。」と云わ

れて、仲の町の大慶鮎と一緒に食べたこともある。私はこのしづやの背に負われて大阪へ行つた。その頃の私はしづやという発音が出来ずに、「しいや、しいや。」と呼んでいた。

鶴屋の前を通りかかると、店先に吉原の三婆の一人である名代のその家のお祖母さんと、私たちの餓鬼がきだいししょう大将であつた中学生の実さんがいて、実さんが私を見かけて、「清ちゃん、どこへ行くの?」と呼びかけたのを聞き流して行くと、いきなり後から大きな掌てで目隠しをされた。やつと振りほどいて見ると、支那人の幫ほ間うかんの華玉川がにやにや笑いながら立っていた。

「清ちゃん、別べつびん嬪びんさんを連れて澄ましてどこへ行くの?」

「知らないよ。」

「教えてくれないと、もうお祭がきても肩車をして屋台踊やたいおどりを見せてあげないから。」

「二葉屋へ行くんだよ。」

「さては、またけいらん巻を買いに行くんだな。」

「違ちがい。」

「はははは。家へ帰つたら御隠居さんによろしく。」

桜川華玉川は支那人の幫間で手品を売物にしていた。大男でいつも支那服を着ていた。その年も京二の君津楼の初午はつうまの催しで、得意の手品で私たちを堪たんのう能のうさせてくれたが、声色、手踊なんかよりはこの方が子供たちには人気があつた。

角町の角の見番の前でも髪結のおさださんが、清ちゃん、どち

らへと云つて、ものずきな眼つきをしてお糸さんの方を見た。

二葉屋の帰りに揚屋町の角でお糸さんと別れて、私はお師匠さんの許へ行つた。そこでは連中の人たちが次の温習会の日取や席亭の相談をしていた。駒形こまがたの並木倶楽部で派手にやろうと云う人もいたが、近いところで三の輪の新世界でやることにきまつた。私たちの清元の会は巴ともえかい会かいという名称で、いつも足場のいいところから、土手八丁もようやく尽きる処三の輪のとばくちにある新世界という料理屋兼業の家か、たまには土手向うの田中町にあった吉影亭という貸席を借りて催した。巴会御連中では私なども古顔の方で、「水道尻の太夫さん。」ということになつていた。「ところで、水道尻の太夫さんにはなにを語つて戴けますか？」

と鶴屋の主人が云った。この人の息子の実さんは私の遊び友達である。私は黙ったままお師匠さんの顔を見た。お師匠さんも咄嗟とっさに「さあ？」という顔をした。「ぼく、三千歳にしようかしら。」と云ったら、鶴屋の主人が「おっと、三千歳は先刻おれが約定済みだ。これだけは譲ゆずれない。」と云つて、大人たちだけにわかる含み笑いをした。お師匠さんは、「そうね。清ちゃんはもうじきお染が上がるから、いつそお染にしましょうよ。休まずにいらつしやい。」と云った。私はいそいでお染を上げて温習会に出すことになった。

家に帰ってから晩御飯のとき祖母から、「清、お前はお糸さんに食物屋ばかり教えたそうじゃないか。」とからかわれた。私は

あそこは日新亭（洋食屋）、ここが大村（そば屋）、あそこが相
亀（鰻屋）、ここは野村や（水菓子屋）という風にお糸さんに教
えたのである。

「そのうちお糸さんに奢おごらせる魂こんたん胆たんなんだろ。日新亭のハヤシ
ライスが食べたいってよく泣いたのは誰だっけね。」私は子供の
頃、ハヤシライス位うま旨いものは知らなかった。

その頃吉原ではたいていの家が都新聞を読んでいた。ちようど
「大菩薩峠だいぼさつとうげ」が連載されていて、私の家でもみんな愛読して
いた。おそらく新聞の読物としては、これほど作中人物が読者に
馴染深く親しまれた小説も少ないのではないだろうか。竜之助、
兵馬、お松、お君、お銀様、米友、七兵衛、それぞれに鼻はな肩かたがあ

った。子供の私は兵馬が好きで早く竜之助を討たせてやりたかった。祖父はまたムク犬がお気にいりであった。都新聞にはほかに誰が担当していたのかは知らないが、「見たり聞いたり」という欄があつて、これは祖母が毎日楽しみにして、長火鉢の傍で老眼鏡をかけて音読していたのを覚えている。

お糸さんが家に来てからは、父のためにはお糸さんが午前中稽古の客の来ない折りに読んで聞かせていた。蔵の二階の稽古場でお糸さんが読んでいるのを、私は梯子段の中途に腰かけてこつそり聞いたこともある。「巧く仕組んでいるものだね。」とか、また三面記事でも読んでもらっているのである。「可哀そうに。」と父が云うのが聞えることもあった。お糸さんはまた父のために

新聞のほかにも本を扱んで、暇をみては日課のようにして読んで聞かせていた。お糸さんが使っていた用筆筒の上に「草枕」や「彼岸過迄」が載っているのを見つけて、私も借りて自分で読んでみた。私がそんな本を読んだのはそのときが初めてであったが、自分に解る程度に読んでいて結構面白かった。「彼岸過迄」の中にある、雨の降る日に子供を亡くしたので雨の日には訪問客に会わないという話なども、子供心に印象深く残った。また「草枕」では床屋のくだりが面白くて繰返し読んだ。床屋の親爺が「竜りゅう閑かん橋ばし」ってのは名代の橋だがなあ。」と口惜しそうに云うのが、読んでいてとても可笑しかったものだ。「彼岸過迄」の中に「高等遊民」という言葉が出てくるが、「高等遊民ってなあに？」と

お糸さんに訊いたら、一寸考えてから、「お祖父さんのような人のこと。」と笑いながら云った。お糸さんは私がそういう本に興味を示すのを見て云った。「清ちゃんはわせのように見えるところもあるけれど、ほんとはおくてなのね。」けだし知己ちぎの言であろう。お糸さんは自分からは私にそういう読書をしやうよう懲ちやう憑ようするよ
うなことはなかつた。

私はまた時折お糸さんから習字の稽古をしてもらうようになった。お糸さんはこないだまで、麻布六本木にいるさる書道の先生の許に久しく学んでいたそうで、母が私のために思いついたのであった。お糸さんは私の書く字を見て手筋ほがいいと褒めてくれた。平素好ましく思っている人から聞いたこの支持の言葉は、その後

長く私の頭にこびりついていて、字の上手と下手とでは少くとも月給が拾円は違うと、当時の相場に掛けてわが悪筆を人から憫れあわまれるようになってからも、私の自信の源になっていたので、おかしなものである。お糸さんは私のお手本には智永ちえいの千字文を
択んでくれた。

四月八日の花まつりにはお糸さんと一緒に竜泉寺町の大音寺にあまぢや甘茶をもらいに行った。甘茶をもらいに行くのは私の役目で、まえの年にはなかやと一緒に行った。この年毎の灌かんぶつえ仏会の行事は私の家などでも嘉例かれいの一つになっていた。単に甘茶をもらってくるだけのことであったが、つい外すというわけにも行かなかつたのは、以前貸座敷業を営んでいたときの縁起を祝う習慣が残つ

ていたからであろう。吉原ではたいていの家が、わざわざ浅草の
 観音さままで出向かずに、近間の大音寺で間に合わせていたよう
 である。もつともこの寺は三の輪の浄閑寺と同じく遊女の骨を埋
 めた処で、むかしから廓とは因縁浅からぬものがあつたからでも
 であろう。「たけくらべ」に「大音寺前と名は仏くさけれど」とあ
 るのがそれである。甘茶をもらつて家に帰ると私にはもう一つや
 る仕事があつた。半紙を短冊形たんざくがたに切つて、それに「千早振る卯ちはやぶ
づき月八日は吉日よ、さきがけ虫を成敗ぞする。」という文句を虫と
 いう字をさかしまに書いて、それを台所の柱に貼りつけるのであ
 る。さきがけ虫とは如何なる虫ぞ、なんの禁ましな厭ないであつたか覚え
 ていないが、妙なことをしたものである。まえの年に書いた煤すすけ

たやつをきれいに剥ぎとつて、その跡へ新規に貼るわけである。祖母は「お糸さん。折角ですが、お前さんも一筆。」と云つて、お糸さんにも一枚書いてもらつて、へつついの後の柱と冷蔵庫の横の柱と二箇所に貼りつけた。私たちの仕事の終るのを見ていた祖母は、えらい労でも犒ねぎらうように「御苦労さん。」と云つた。その一安心したようなまじめ顔を見ると、私もなにか一仕事したような気持になつた。

吉原の縁日は午うまの日で土地柄賑やかな夜店が出た。その日には境界の町の人たちも、大門口から五丁目の非常門から裏門からそれぞれ詰めかけてきて、素見客ひやかしの仲間も常よりは多くその賑いは格別であつた。夜店商人は夕方の三時頃からぼつぼつ検査場横の

空地に集まつてきた。荷車を引いてくる者、自転車を利用して
る者、大風呂敷を背負つて徒かちでくる者、さまざまであつた。いい
加減集まつたところでくじ引きをして、各自割当てられた場所へ
荷を運ぶ。植木屋だけはいつもひとかたまりになつて、夜店の列
の尽きるあたりに店を出していた。この場所ぎめの際の一喜一憂
する表情は見ていて面白かつた。くじ運のいいとわるいでは、そ
の夜の商いに觀てきめん面にひびくわけである。夜店の並ぶ場所は、震
災後もずっと後になつては水道尻に限られたが、その頃は仲の町
から水道尻一帯にかけてであつた。ただ桜や菊の季節にはその美
觀を守るために、仲の町を避けて貸座敷のある通りに移つた。

子供の私たちが、午の日を楽しみにして待つ気持と云つたら、

なかった。そのまえの日から明日の天気を気にして、翌朝起きてみて雨が降っていればがっかりして、それでも夕方までには晴れてくれないかしらと未練がましく思ったりしたものだ。その日にはこの界限にくる豆腐屋もラツパを吹いたあとで、「とうふい、なまあげ生揚、雁もどき、がんこんちは午うまの日。」と常よりは愛想のいい声を出した。

夕飯を食べてから、のぶちゃんが迎えにきたので、お糸さんと三人で出かけた。のぶちゃんに聞くと、はじめさんは夕飯もそこそこにして飛び出して行ったそうである。

「のぶちゃん、兄さんがあつていいわねえ。」とお糸さんが云つたら、のぶちゃんはかぶりを振って、「うちの兄さんはとても意

地悪なのよ。あたしをからかつてばかりいるの。問屋の番頭さんからお小遣いをもらったからって見せびらかしたりして。」と不服そうに云った。

あまり年の違わない兄妹はそういうものなのかも知れない。大人になればまた違うのであろうが。そう云えばはじめさんは、私とのぶちやんが遊んでいるときなど、ふいに物蔭から出てきて、のぶちやんの頬つぺたを突いたりして、「のぶ公の阿多福おたふくやい。お洒落しやれしやれても惚ほれ手がないよ。お臍へそが出べそで嫌われた。」そんなことを云って囃はやしたてては、のぶちやんにべそを搔かかせたりしたものだ。

私はいちど学校の帰りに、はじめさんから誘われて、寄り道を

してはじめさんのお母さんがその内職をしている馬道の玩具問屋へ行ったことがある。はじめさんのお母さんからその番頭さんになにか託ことづけがあつたのである。番頭さんは二人に金平糖コンペイトーのお菓子をくれて、そのうえはじめさんには拾銭白銅を一つお駄賃だちんにくれた。はじめさんは大事そうにそれを兵児帯へこおびの間にくるんで、帰る途々みちみち落しはしないかと時々手で触りながら、「ぼくは来年学校を出たら、あの問屋さんに奉公に行くんだよ。どうせぼくは勉強が出来ないんだから仕方がないや。清ちゃんは中学校へ行くんだろう。おつ母さんはね、番頭さんがいい人で気心が知れているからあの問屋さんがいいつて云うんだよ。番頭さんはぼくがお使いをするたんびにお駄賃をくれるんだ。」と云つた。

角町の稲本楼の前に出ている馴染の本屋で買物をしていたときに、はじめさんが実さんと連れ立ってくるのに逢ったが、はじめさんはわざとそっぽを向いて、チエツ、チエツと云って行き過ぎた。女臭くてかなわねえやと云わんばかりのそぶりであった。のぶちゃんは顔を曇らせて、私たちの気を兼ねるように、「どうして、うちの兄さんは、ああいけずだか。」と云ったが、その口振りには日頃の母親の嘆息をそのまま踏襲とうしゆうしているようなふしが見えた。

本屋で私はその頃発刊されていた『良友りようゆう』という少年雑誌を、のぶちゃんは『少女世界』を、そしてお糸さんは古い『新小説』を二冊買った。お糸さんはまた小間物屋でのぶちゃんに根掛

を買ってやった。

あくる朝私が御飯を食べていると、いつものように、「清ちゃん、学校へ行かないか。」と節をつけて呼ぶはじめさんの声が聞えた。学校へ行く道ではじめさんは、「清ちゃんはきのう午の日でなにを買ったの？ ぼくはこれを買った。」と云って、^{かばん}鞆から三輪車の形をしている智慧^{ちえ}の輪^わの玩具を取出して見せた。

その日の夕方私はお齒ぐる溝に落ちた。実さんやはじめさんやのぶちゃんなどと溝のふちにいて、一元楼の蔵移しの工事を見ていたときに落ちた。私の家の隣りは一元の寮で、庭中いっぱいに大がかりに菊の栽培をしていた。季節に仲の町を飾る菊もこの庭のものであった。京二では宝来楼一元楼などは、お齒ぐる溝を

境にして店と寮とが別れていた。私の家などもかつてはそうであったが、店の方を人に譲ってから寮の庭を解放してそこに長屋を建てたわけなのである。はじめさんの家は長屋のいちばんはずれの溝際で、私たちはその窓下に集まって遊んでいたのである。お齒ぐる溝は思いのほか深く、あつと云う間に小柄な私は胸もとまで泥水の中に沈んでしまった。そのとき、工事に従事していた人足の人が駈^かけつけてくるよりも早く、直ぐ溝に飛び込んで私を引き上げてくれた人を見ると、助ちやんであつた。ちやうど私の家に稽古にきた帰りに通り合わせたのであつた。

泥んこどろになつて助ちやんと私が帰つてきたので、家ではびつくりした。私たちはすぐ湯殿へ廻つて軀を洗い、沸いていた湯に入

った。私は溝に落ちたときには肝きもを潰つぶしたが、その驚きもせずまると、こうして助ちゃんといつしよに湯に入ったことが珍らしくて、「なかや。おもちゃ箱から椰子やしの実を持ってきて。」と大きい声で云つたら、なかやの返事はなくて「とぼけちやいけないよ。」と私を叱る祖母の声が聞えた。椰子の実は祖父と仲のいい友達である京一の水鉄という水菓子屋の主人からもらったもので、私が湯に入るときに弄もてあそぶ玩具の一つであつた。私の気持ではそれで助ちゃんをもてなすつもりであつた。

助ちゃんは私の背中を流してくれながら、

「清ちゃん。さっきのあの子はどこの子です？」

「あの子って？」

「清ちゃんのことを後から押した子ですよ。」

助ちゃんの云うことがわからないので、

「誰も押しやあしないよ。」と云つてふりむいたら、そういう私の顔を見て、ふいに助ちゃんは黙つてしまった。

湯から出たら、汚れた二人の着物は既にお糸さんが洗濯して、物干竿に乾してあつた。私は母から云われて改めて助ちゃんにお礼を云つた。助ちゃんは「いい塩梅あんばいでした。あたしが通り合わせて。」と云つて、それから如何にも感心したように、「清ちゃんはい。」と私のことを褒ほめた。私が自分を溝に突き落した友達のことを庇かばつていと云うのである。私には思いがけなかつた。私は自分の不注意から落ちたとばかり思つていたから。助ち

やんにそう云われてもなにも思い当ることはないのである。

「誰も押さなかつたよ。」とくりかえしたら、祖父があつさり、

「うん。押したというわけでもなかつたのだらう。」

と云つた。

祖父はまた、「助公。お前、着物を汚よごして気の毒したな。下帯まで汚れちまつたろう。」と云つて、祖母に云いつけて自分の着物を一揃助ちゃんのために出させた。助ちゃんはなにならなにまで祖父の物を身につけて帰つた。助ちゃんが溝に飛び込む際に脱ぎ捨てた下駄は、のぶちゃんが持つてきてくれていた。

翌朝学校へ行きながら、のぶちゃんの話の話を聞くと、私が溝に落ちたのは後からはじめさんが押したからであつた。はじめさんは、

ほんとに押ししたのではない、押す真似をしたただけだ。おっ母さんに云いつけたら承知しないぞとのぶちゃんを嚇おどかしたそうである。学校で休み時間に砂場で遊んでいたときに、不意にはじめさんが現れて、

「清ちゃん。ごめんね、ごめんね。」とひどく思いつめた口調で、私の顔を覗き込みながら云った。

「ううん。なんとも思っていないよ。」と云ったら、安心したらしく、いつもの快活な顔つきになつて

「ぼくはただ清ちゃんをびっくりさせようと思っただけで、ほんとに落つことすつもりじゃなかったんだよ。」と云った。おそろくそれが真相であろう。押された当人にまるで覚えがなかったの

だから。私としても腹の立つわけがなかったのである。

学校から帰ったら、ちようど助ちゃんが稽古にきていて、離れ
でお糸さんが洗濯した助ちゃんの着物の綻ほころびを繕つくろっていた。そこ
にとり纏まとめてある下着や帯や足袋たびを見て、私が、

「これ、みんな助ちゃんのこと？」と訊きいたら、お糸さんは、

「そうよ。あの溝の水は臭いわね。いまでも臭いが鼻についてい
るようよ。」と云って、試すように、着物の袖口を鼻さきへ持っ
ていって嗅かぐ真似をした。

「におう？」

「まさか。」

祖父がそばから、

「そうだろう。お歯ぐる溝と云やあ、名代の溝だからな。それにふだん清やはじめが、たんと小便を仕込んでいるだろうから。清が落ちたのは天罰だが、助公もまたよく飛び込んだものじゃないか。」

吉原のお歯ぐる溝は昔はとてもきれいで、川幅などもずっとひろく、家鴨あひるがおよいでいたり、小舟がうかんでいたりして、その時分の花魁おいらんは小がいのお椀わんいっぱいの水で、口をそそぎ顔を洗ってうらの川にすてたところから、そういう名前もできたのだそうであるが、私たちのたけくらべ時代には、そんな錦絵にでもありそうなおもかげはさらになくて、ただの汚い溝川でしかなかった。

やがて稽古をすませて助ちゃんがきた。助ちゃんは昨日帰ったときの服装のまま、祖父の着物を着ていた。着替の持合わせもなかったのかも知れない。助ちゃんはお糸さんに礼を述べて、

「それでは、おなかさんの部屋でも拝借して、一寸着かえさせて戴きます。」と云った。すると祖父が、

「助公。その着物はお前に遣ったんだ。水臭いぞ。それとも年寄りの肌につけたものはいやなのか。」

助ちゃんはあわてて、

「いいえ、とんでもない。有難く頂戴します。」

「まんざら、着られないこともないだろう。」

「ほんとに、助ちゃんによく似合いますわ。」

「そうですか。どうも有難うござんした。」

助ちゃんは自分の衣類を風呂敷包にして帰った。私は助ちゃんが涙ぐんでいたように見えたので、

「助ちゃんたら、泣いているの。」と云ったら、祖父は笑いながら、

「お糸にやさしくしてもらったせいだろう。」

「いいえ。助ちゃんはおじさんのことが好きなんですわ。」とお糸さんは真顔で云った。

その日を境にして助ちゃんの足が一寸跡絶とだえた。毎日のように来ていた者が顔を見せなくなるのは気がかりなもので、祖父は助

公の奴どうしたのだろう、具合でも悪いのじやあるまいかと心配していた。そのうち父の弟子の中ではいちばん古参の越春さんが助ちやんの消息をもたらした。その話によると、当時助ちやんは浅草公園のある色物席に臨時に出演しているということであつたが、それがちよつと變つていた。

「御隠居さん。一体なにをやっていると思ひますか？」と越春さんは云つた。

「まさか助公が手品をやりやあしまい。」

「手品ならよござんすが、それが『ハイカラ壺坂』っていうんですから、呆れるじやありませんか。」

「ふうん。『ハイカラ壺坂』とは助公も考えたもんだな。お里が

髪をハイカラか女優髷まげにでも結っているのか？」

「冗談ごとじやありませんわ。聴いている方が恥ずかしくなってくるんですから。御隠居さん、なんとかやめさせるわけには行かないでしょうか。お師匠さんの名折れにもなりますし、あたしたちだって外聞が悪いですわ。」

「そうか。そんなにひどいものか。それにしても席でよくやらしておくな。」

「それがよくしたもんで、お客には受けているようなんです。」

「それじゃ結構じゃないか。『ハイカラ壺坂』だろうと、『当世鰻谷』だろうと、客が来て木戸銭が取れれば結構じゃないか。なにも身過ぎ世過ぎだ。」

祖父が取合わないものだから、越春さんもそれきり話をやめた。私はまえにも助ちやんの悪口を聞いたことがある。助ちやんが父の許に稽古に来るようになった頃、誰かが助ちやんのことを「稽古屋ゴロ」と云ったのを耳にして、母に「稽古屋ゴロってなあに？」と訊いたら、「子供はそんなことを知らなくともいい。」と叱られた。父の弟子は多く女弟子であつたが、助ちやんはいちばん新参でそのうえ肝腎の浄瑠璃じようるりがあまり上手でなかつたようだから、誰からも侮あなどられていたようである。いまにして思えば、助ちやんが祖父の「お得意」であつたことを心よからず思つていた者もあつたのかも知れない。

四五日して日曜日のこと、また越春さんがきて、助ちやんのこ

とで新しい話題をもたらした。浅草公園のある演芸場に出ている「どじよう掬すくい」の女芸人に助ちやんが夢中になつていてという噂うわさを。越春さんは茶の間で祖母と話していた。

「惚ほれるにことを欠いて、どじよう掬すくいだなんて。」と祖母が露骨に眉を顰しかめた。

「阿呆あほうでそのうえ悪擦わるずれしているんですから、かないませんわ。」と越春さんは云つた。越春さんは助ちやんのことというど、なぜかむやみに反感を募つらせる傾つきがあつたようだ。

私は縁側について水絵具で庭木の写生をしていたが、子供心に聞きづらい思しいをした。人の心にはなぜ悪意や皮肉が巣くうのだらう。私は助ちやんに対しては、こないだ溝に落ちたのを助けても

らったからということばかりではなく、まえからなんとなく親し
みを感じていた。越春さんの話は私のその子供心を損そこなうものであ
った。助ちゃんのことを口汚く云った言葉が、私に助ちゃんを侮
る気を起こさせずに、反って大人同士の陰口を疎うとましく思わせた。
助ちゃんはなぜあんなに悪く云われなければならぬのだろう。
私はお糸さんを探してみたが、買物にでも出かけたのか、見えな
かった。

私はお糸さんの顔を見れば気が晴れるように思った。お糸さん
の眼や唇にかつて意地悪や冷淡の色が見えたことはなかったから。
私は桜林へ行ってみた。桜の花は大方散り尽して葉桜になつてい
る。遊んでいる子供の群の中に実さんやはじめさんの姿が見えな

かったので、そこを去って、水道尻の通りを仲の町の方へ歩いて行ったら、京一の角にある時ときいずみ和泉という酒屋の前にのぶちゃんのぶちゃんがいた。のぶちゃんは酒屋の前にあるポストによりかかって、独りでつまらなそうにお手玉をしていた。のぶちゃんは私が来たことに気がつかない。私はそつとポストのうしろに廻って、腕を伸ばして両掌でのぶちゃんの眼隠しをした。のぶちゃんはあつと低く叫んだが、眼隠しの掌をふりほどこうともせず、

「だあれ？」私が押し黙っていると、くすくす笑い出した、

「清ちゃんでしょう。」

私は掌をのけた。

「やっぱり清ちゃんだ。すぐわかったわ。」

のぶちちゃんはポストのわきに落ちたお手玉を拾いながら、私の顔を見上げた。見るとのぶちちゃんの眼にはうすく涙が滲にじんでいる。

「なんだ、泣いていたの？」

「ううん。」

「でも涙が出ているじゃないか。」

「だって清ちゃんが、きつく眼を押したんですもの。」

「あ、そうか。ごめんね。」

「ううん。いいの。」

それでものぶちちゃんはなんだかしよんぼりしているように見え
た。

「またはじめさんと喧嘩したんだろ。」

「うそよ。兄さんはきょう浅草へ活動を見に行つたわ。」

「のぶちゃんはどうして行かなかつたの？」

「あたし行きたくなかつたの。清ちゃんはきょうはお稽古に行かないの？」

「うん。日曜には行かないんだ。」

「あら、そうね。忘れてたわ。」

私はのぶちゃんと話しているうちに、さいぜん越春さんの話を聞いたときのいやな気持を忘れてきた。

「ねえ、のぶちゃん。二人でどこかへ行こうか？」

「え？」

のぶちゃんはびっくりした顔をした。

「上野の山へ行こうか？」

私の誘いの意味がわかったので、のぶちゃんは嬉しそうにうなずいた。私はまえに実さんやはじめさんなどと、うぐいすだに鶯谷から上野の山を抜けてどうかんやま道灌山まで遊びに行つたことがある。かえりには日暮里から三河島を通つて歸つてきた。

「あ、そうだ、向島へ行こう。白鬚橋しらひげばしを渡つて。」

のぶちゃんも不安と期待に眼を輝かせたが、ちよつと躊躇ためらうように、

「いまから行くの？」

私たちはともどもに角海老の大時計を振り仰いで見た。十二時を廻っている。私はまだ昼御飯を食べていなかったが、いったん

家へ帰って出直す気にはならなかった。のぶちゃんもおなかがすかないと云った。行くにしても家に無断でなければ気がすまない。私は云い出したときからその気であった。いそいそと同意したのぶちゃんを私はいつになく可憐に思った。

五十間の通りで小ふじさんがおかよさんという朋輩と連れ立って来るのに行き逢った。

「おや、おそろいどこへ行くの？　今戸公園いまど？」

「違うよ。内緒だよ。」

「内緒？　いやだわね。まだ肩上げもとれない癖くせして、二人で駈落ちなんかしちやだめよ。」

小ふじさんはおかよさんをかえりみて笑った。

山谷から橋場に出た。その日は好く晴れていたので、白鬚橋の上からは遠くに筑波山つくばさんが見えた。私たちは川風に吹かれながら橋の欄干らんかんにもたれて、鐘ヶ淵かねふちの方からきた蒸気船が小松島の発着所に着いてまた言問こととの方へ向かつて動き出すまで見ていた。私が夏泳ぎに行く水練場の在る処はこの少し上流で、千住の鉄橋の近くであつた。その頃白鬚橋を渡るのには橋銭はしせんをとられた。向島側の橋の袂たもとに関所のような小屋があつて、そこで橋銭を徴集した。回数券なども発行していたようである。震災後しばらくしてから橋銭は不要になつた。墨田堤すみだづつみに上つてから、私たちははじめは白鬚神社のある方へ行くつもりであつたのをやめて、梅若の方へ行つた。水神には私の親戚の家があつた。けれども、ひと

りならばともかく、のぶちゃんを連れては寄る気にならなかつた。私たちは鐘ヶ淵のさきを墨田堤の尽きる^{あた}辺りまで行き、荒川放水路に架^かかつた堀切橋を渡つて堀切の方まで行つた。日曜のことなので放水路の堤には三々五々^{こつらく}行樂の人の姿も見えた。私たちも一面に蒲公英^{たんぽぽ}や土筆^{つくし}の生えている堤の斜面に腰を下して、橋の袂の掛茶屋で買つた餡^{あん}パンをかたみに食べた。私たちもまだ稚^{おきな}かつた。こんな子供じみた行動さえが、私たちにとっては一つの小さい冒険であつた。私は自分に^{そその}唆されたのぶちゃんが従順に附いてきたことに気をよくしていた。

それでも気がかりだつたので、

「晩御飯までに帰ればいいね。」と云つたら、のぶちゃんは、

「ううん、いいのよ。遅くなつてもかまわないわ。」と云つた。

私たちは堤を下りて田舎道を四つ木の方へ歩いた。この辺りあたりは

まったく田舎である。小川があり土橋が架かり、水田があり木立

がある。畑に耕す人の姿も見える。歩いているうちに私は駒下駄

の鼻緒はなおを切つた。のぶちゃんは袂の中を探したが、鼻緒の代りに

なるものはなにも見つからなかつた。すると、その道のほとりに

煙草や荒物を商あきなっている家があつたが、店先に坐つていたお婆さ

んが私たちに呼びかけて、これでおすげなさいと云つてお手製の

前つぼを呉くれ、また火箸を貸してくれた。私はただ黙つてのぶち

やんがすげてくれるのを見ていた。私は内弁慶いべんけいで外ではから意い気く

地じがない。知らない人とは口がきけなかつた。私はのぶちゃんが

私の代りに、はきはきと礼をいい、また器用に鼻緒をすげてくれるのに驚いた。

その家の傍には釣瓶井戸つるべいどがあつたので、のどが渴かわいていた私たちは水を無心した。

「お婆さん。水を飲まして下さいね。」とのぶちゃんが云つたら、お婆さんは、

「さあさあ、たんとおあがんなさい。」と云つた。切髪のどころなく小意気なお婆さんであつた。根からの近在者には見えなかつた。

日が蔭つてきたので私たちはあわてて帰途についた。墨田堤を水神の森の方へ下りる坂みちのある処へきたときに、その坂を角つ

のかくし

隠をつけた花嫁の連れが四、五人提ちようちん灯をさげて登つてく
るのに行き逢つた。花嫁は母親らしい人に附添われて目を伏せて
いた。一行は堤に出るとすぐまた反対側の坂を下りて行つた。の
ぶちゃんぶちゃんは女の子らしくいつまでも見送つていたが、私が促すと
小走りに走つてきて、無心に笑いながら私の掌の中に自分の掌を
あずけた。なんの奇もない遠足であつたが、私たちの幼心は満た
されていた。

なわのれん

白鬚橋を渡つた処に縄なわ暖簾のれんを下げた居酒屋があつて、既に灯
の点ついた店の中には卓を囲んだ五六人の人影が見えた。物を煮る
湯気と酒の匂いが往来にまで流れてくる。私たちはふいに里心と
とりつかれたように足を早めた。

私たちが大門を入ったときには、もうまったく夜の帳とぼりが下りていた。私は仲の町の灯を見てほっとすると共に、ようやく家に近づくにつれて家の人の思惑が気になった。

「家へ帰ってから叱られないかい？」

「大丈夫よ。」

のぶちゃんの家の前に来た。のぶちゃんは私をかえりみて首をすくめて笑って見せてから、格子戸に手をかけた。のぶちゃんの後姿にはその臆した心がまる見えだ。私は背後に格子のあく音を耳にすると、長屋の前の敷石道を逸いっさん散に駈けだした。

家に帰ると茶の間にみんな集まっついていて、口々にどこへ行つた？ とたずねられた。

「昼御飯を食べないでどこへ行つてたのさ。のぶちゃんも一緒だったのかい？」と母が云つた。小ふじさんが家にきて、のぶちゃんと私を見かけたことを話して行つたのである。

「それで、水神の家へは寄つたのかい？」

「ううん。」

「寄ればよかつたのに。お前、またなぜ黙つて行くのさ。おかしな子だよ。お糸さんに御心配かけたよ。すみませんでしたつてお詫^わびをしなさい。」

私は訴えるようにお糸さんを見た。お糸さんはなにもかも承知しているように頷^{うなず}いて、

「いいえ、いいの。もういいのね。あたしもお伴したかつたわ。」

こんど清ちゃんに向島を案内していただくわ。お弁当をつくって行きましようね。」

「お祖父さんがかまうものだから、とぼけた人間が出来そうだよ。」と祖母が云ったら、祖父は、

「馬鹿野郎。清はおれの孫だ。どんな人間になってもいい。おれの気に入らねえことだけはするな。」と云った。

なかやがきて「お直さんが見えました。」と云った。お直さんというのはのぶちゃんのお母さんである。立っていった母の後について行くと、裏口の格子戸の中にお直さんとのぶちゃんが立っていた。お直さんが詫^わびを云えば、私の母も詫^わびた。母はのぶちゃんに前垂の小切をあげた。そこへまたはじめさんが、お店から

人が見えたと言つて、お直さんを迎えにきた。はじめさんは私の顔を見ると、

「のぶ公はね、清ちゃんのように清元を習いに行きたいつて云つて、けさおつ母さんに叱られたんだよ。」

「うそよ、うそよ。」

「なにがうそだい。おつ母さんが浅草へ行つてこいつて云つても、ふくれて行かなかつたじゃないか。」

「兄さんの意地悪。」

のぶちゃんは泣きそうな顔になつて、お直さんが、「なんだよ。お前たちは。」と云うより早く、「知らない。」と云うと格子戸をあけて逃げるように駆けだして行つた。やがてお直さんもはじ

めさんも帰って行つた。

祖父はおなかをすかしている私を日新亭へ連れて行つてくれた。祖父に連れられて行くのも久し振りであつた。祖父は自分はスープを、私にはハヤシライスあつらを誂えた。おかみが出てきて祖父に挨拶した。この人はいつも髪をハイカラ巻おぐにしていた。私はこの人に尾久の大滝おぐに連れていつてもらつたことがある。

「御隠居さん、しばらくお見かけしませんでしたね。清ちゃんも、いらつしやい。来月はまたお祭ですね。今年は派手にやるそうですよ。」

「そうか。この節はすっかり引つ込んじまつているもんだから、さつぱり様子がわからない。」

「なんでも、歌舞伎見立の仮装行列を大掛りに催すって話だそうですね。大文字屋の旦那がひどく乗気なんだそうです。」

「乗気はいいが、あの腰抜けじゃあ、行列には出られまい。」

当時の大文字屋の主人は神経痛で腰が立たず歩くことが出来なかった。

「それが御隠居さん、考えたものじゃありませんか。大文字屋さんの役だけはもう極まっているようですが、なんだと思いますか？ 鈴ヶ森の長兵衛なんですよ。」

「なるほど。駕籠かごで行くというわけか。腰抜けの考えそうなことだ。」

「相変らずお口が悪いですね。なんでしたら、御隠居さんも一役

買つてお出になつたら、いかがですか？」

「馬鹿野郎。この年をして顔に白粉おしろいを塗れるか。」

祖父は見たたり聞いたりする事は好きであつたが、自分ではな
に一つやらなかつた。「お祖父さんは楽屋名人で江戸っ子の総そうも
元締とじめのつもりでいるんだから。」と祖母がよく云い云いしたも

のだ。煙草はまるでやらず、酒は若い頃には無茶に飲んだことも
あつたようだが、五十を過ぎてからは殆ど盃ほとんきかずきを手にしなかつた。

その夜帰りにお齒ぐる溝に沿つて歩いてきて一元楼の裏手に来
たとき、祖父は思い出したように、「清、お前が落ちたのはここ
か？」と云い、いきなり溝の中に小便をしながら、「助公の奴、
しばらく来ないなあ。」と呟いた。

つぎずえ
月末に三の輪の新世界で巴会の例会があつた。祖父は顔出しはしなかつたが、私のために心配して、烏帽子籠えぼしかごに入れた長命寺の桜餅を来会者に配つた。……足と橋場の明ちかき、はや長命寺の鐘の音も、というお染の段切の文句ちなに困なんだお土産みやげで、お糸さんがわざわざ向島まで出向あつちいて逃あつちえてきてくれたものである。祖父は「おのぶと向島みちゆきに道行みちゆきをして、その後でお染を語るんざあ、趣向が出来すぎている。」と云つた。お糸さんは当夜も私に附ついてきてくれて、なにかと世話を焼やいてくれた。私のお染は幸あにして評判がよかつた。「清ちゃんの節廻ふしまわしにはとても巧こうし者やなどころがあるわ。」とお糸さんは褒ほめてくれた。

三社祭がすむとまもなく吉原神社の祭礼がある。当時の吉原は名物の花魁道中は既に廃止されていたが、まだ派手気の残っていた頃のことから、祭礼の余興には芸者の手古舞、幫間の屋台踊などいろんな催しものがあつた。その年は日新亭のおかみの話のように、貸座敷の楼主や台屋の有志の発起で、歌舞伎見立の仮装行列が大掛りに催されたが、思いがけなく私も一役振りあてられて、その行列に加わることになった。

祭の二、三日前に水鉄の主人が祖父の許に来て、仮装行列の話が出た。

「実はおれもその行列に出なきやならねえ。」と水鉄のおじさんが云つた。

「そいつは御苦勞だな。大文字屋が長兵衛じゃあ、お前さんはさしずめ白井権八しらいごんぱちだろう。」

「ひやかしちやいけねえ。年寄りの冷水だが、仕方がねえ。おれは高野物語だ。」

「高野物語というと、なんだな、石童丸か。お前さんが石童丸になるのか。」

「まさか。茶番じゃあるまいし。おれはかるかや芍萱よ。」

「昨日そ剃つたも今道心というやつか。柄になく信心氣を出したもんじゃねえか。」

「なにも信心氣でやるわけじゃねえ。いわばつとめぎ勤氣よ。お前さんにしろおれにしろ、吉原じゃあふるだぬき古狸だ。ところで、お前さん

に頼みというよりは、清坊に頼みがあるんだが」と水鉄のおじさんはそばにいた私をかえりみて、「どうだろう？　石童丸に清坊を借りたんだが。」

「お安い御用だが、石童丸にしちやあ、清は大きかないか。」

「なに清坊は小柄だし、おとなしいし、石童丸は柄だ。それにおれは思い立ったときから石童丸は清坊ときめていたんだ。なあ清坊、お祭りの日にはおじさんと一緒に仲の町の町を歩いてくれ。べつになにをするわけじゃねえ。石童丸の態なりで歩くだけの話だ。」

私が困って返事をしないと、祖父も笑いながら、「水鉄の親方に見込まれたんじや、清も断るわけにはいかないな。」と云った。こんなわけで、私は仮装行列に出ることになった。

仮装行列の人数は百人近くの大勢で、衣裳、鬘かつらなども本式のを
 損そんりよう料で借り、芝居の衣裳付や床山が出張してきていて、当日
 私が本陣である大文字屋へ行つたときには、その庭先に助六、権
 太、法界坊、お嬢吉三、定九郎など、それぞれ扮装ふんそうを凝らした
 連中が勢揃いしていた。大文字屋の主人は既に棒鼻へ「するがや」
 の提灯をさげた駕籠かごにどっかり納まつていた。水鉄のおじさんは
 と見れば、墨染すみぞめの衣を着て浅黄縮緬あさぎちりめんの頭巾ずきんを冠かむり、片手に花
 桶片手に念珠ねんじゆ、すつかり苳萱道かるかやどうしん心になり澄ましていたが、
 私を見ると、「や、石童丸が来た、来た。」と云つた。

私はすぐに庭に敷いてある莫座もざの上で、手伝いに来ていた小み
 なさんという年増芸者から、石童丸の顔を拵こしらへてもらった。稚児ちごわ

輪鬘かづらをつけ、常盤御前ときわごぜんの冠かぶるようなあの塗笠ぬりがさにそれから杖を持つと、それで私の仕度は出来上った。

水鉄のおじさんは私のそばに並んで立つて、ちよつと型をして、「どうだ、宗十郎きのくにやに似てやしないか。」と云つて笑つた。小みなさんが、

「清ちゃん。あたしの口真似をしてごらん。」

「なあに？」

「いいかい？ それ、このみ山に、」

「このみ山に、」

「今道心、」

「今道心、」

皆んな笑った。

私たちはすっかり仕度の出来たところで、記念写真を撮って、それから行列を繰り出した。私は水鉄のおじさんと並んで歩いた。私ははじめは恥ずかしくてすこし取り上^{のぼ}せていたが、歩いているうちにそれほどでもなくなった。ひとつは素顔でないことが、私を厚顔にしていたのであろう。あとで聞くと、のぶちゃんも行列を見ていて私に気づいたそうである。廓内を一廻りしてから大文字屋に戻って解散した。私は着物を着かえると、白粉もろくに落さずに、家に飛んで帰った。

やはり御輿^{みこし}を担がなければ、お祭のような気がしない。私は盲^め縞^{くらしま}の腹がけをつけ、黒縞^{くろじゆす}子の襟に「小若、花園」とひなた

とかげに染め抜いた浅黄縮緬の祭絆纏まつりばんてんを羽織り、豆絞りの手拭を喧嘩かぶりにして、また家を飛び出した。この祭着は私のためにお糸さんが前から用意して縫いあげてくれたもので、お糸さんは私のその恰好を見て、「まるで、お祭佐七のようよ。」と冗談を云った。

水道尻では君津楼の寮の前に、御輿や四神剣が飾ってあった。私が駆けつけたときは、ちようどこども御輿を担ぎ出すところで、吉原つなぎのお揃いを片肌脱ぎにした、向う鉢巻きのはじめさんが、私を見かけて、「清ちゃん、早くおいで。」と誘い込んでくれた。はしなくも幼友達の名をわが思い出の一齣ひとこまのうちにしるしとどめる折りに遇あった。御輿を担ぐ面々はみな私の竹馬ちくばの友で

ある。実さんやはじめさんを始め、村山（医院）の豊ちゃん、君津（貸座敷）の甚ちゃん、もち尾張（菓子屋）の保ちゃん、長金花（貸座敷）の敏男さん、長島（芸者家）の富ちゃん、加藤（写真屋）の正ちゃん……この加藤という写真屋のことは、「たけくらべ」に正太が美登利みどりに向つて水道尻の加藤でいっしよに写真を撮うつそうと云うくだりがある。並んで肩を入れた私の耳にはじめさんは思いがけないことを囁いた。「揚屋町の御輿に逢つたら、喧嘩をやるんだよ。」私たち子供の間では、水道尻近辺に住む者と五丁町の中央に住む者とは、ふだんいっしよに遊ばなかつた。もとより目立つた敵対の感情があるわけではなかつたが、なんとなくお互いに反感を感じていた。「揚屋町のやつらは、お齒ぐる

溝からこっちは吉原じゃねえと思っていやがる。」とはじめさんは大人ぶった口をきいて、れいによつて団十郎をきめこんだものである。反感の対象として揚屋町の名が代表されるのは、揚屋町の鯉松の横で紙芝居を見物する折りなどに、むこうの連中に大きい顔をされるからであつた。その代り桜林で遊ぶときには、わが縄張りとはばかり、こちらの威勢を示した。通う学校なども、むこうは土手向うの待乳山まつちやま、こちらは千束というように別れていた。京一の通りからはじめて五丁町を「わっしよい、わっしよい。」担ぎ廻っているうちに、仲の町の大忠（震災の時吉原ではこの茶屋の土蔵だけ焼け残つた）の前で、向うから目指す敵の揚屋町の御輿がやってくるのに行き逢つた。はじめさんは「や、揚屋町の

やつらが来やがった。」と云つて、白柄組しらつかぐみの旗本を見かけた幡ぼ随院んずいゐんの身内のような顔つきをした。私はどうなることかとひやひやしたが、流石さすがにいざとなるとみんなも陰で意気込んだほどのことはなくて、無事に擦すれちが違がいかけたが、瞬間申訳まじけみたいな形で私たちの御輿ごよの棒鼻ぼうびが相手の方へ突き出された。「おつと、危あい、危あい。」と云つて、こども御輿ごよの宰さい領りょうをしていた四番組よんぱんぐみのデブ頭でぶがしらと若い衆しゅの徳とくさんが、棒鼻ぼうびに手をかけて御輿ごよを押し戻した。そのとき、はずみで御輿ごよが大きく傾かたいたが、私は右足みぎあしに鋭とい痛みを感じてよろめいた。私はそこに落ち散ちっていた硝子ガラの破片はへんを踏みつけてしまったのである。血ちがなかなか止とまらなかつた。お祭まつり佐さ七しちは意気いき地ぢなく青あおくなつてしまつた。徳とくさんはそういう私

を背負つて水道尻の村山医院に連れていってくれた。私は豊ちやんのお父さんから治療をうけ、足に大袈裟な繃帯おおげさ ほうたいをされて、また徳さんにおぶさつて家に帰つた。

祖母は私のきまりの悪い気持には容赦ようしゃなく、「意気地なしだね。それっぽっちの怪我で、御輿みこしが担げないようですらどうするんだ。」と云つた。母は父の名の印しるしの入っている絆纏を徳さんにお礼にあげた。私は最前怪我をした際に、私をおいてけぼりにして仲間の御輿が遠ざかつて行つたときのことを思うと、面白くなかつた。お糸さんは手古舞てこまいを見に出かけてしまつていたし、祖父の許には客が来ていた。私はふと父の許に行つてみる気になつた。蔵の二階に上つてみたら、父は検査場の方から祭り囃子まつ ばやしの聞えてく

る窓べにもたれて、背なかをまるくして、口三味線で小声になにやら唄っていた。父のその姿を見たら、私はいたずら心をそそられて、そつとしのび寄ってわつと云つて背なかにとりついたら、父は一寸びつくりして、

「なんだ、清か。」と云つた。「お前、お祭なのに遊びに行かないのか。」

「おみこしを担いで、怪我しちやつたんだよ。ほら、こんなに。」

私は足の大袈裟な繻帯に父の手を触れさせた。父はまじめに心配して、

「ばかだねえ。気をつけなきや駄目じゃないか。」

私はふと思いついて、

「お父つあん、本を読んであげようか。」

父は迷惑そうに、

「いいから、下へ行つて遊んでおいで。」

「いいよ。読んであげるよ。とても面白いんだから。」

私はお糸さんから借りた「坊ちゃん」を持ってきて音読した。

読みながら押しつけるように、「面白いだろ。」と云つたら、父は仕方なさそうに、うん、うんとうなずいた。

そのとき検査場の方から、わあとという人のどよめきが聞えた。

なんだろうと思つて窓から軀を乗り出したら、「あぶないよ。」

と云つて父が私の兵児帯へこおびをとらえた。父の力は意外に強かつた。

私たちはすこしの間そのままの姿勢でいた。するとふいに父が後

から私を抱きしめて、私の背なかに熱い「お灸」きゆうを据えた。私は小さいときよく本物のお灸も据えられたが、また父はよく冗談に私をとらえて、私の背なかに自分の口を押しあて強く息を吐きかけては、「お灸だよ。」と云ったりした。父の吐く息が着物を透とおして背なかにあたたかく感ぜられる。私は「お灸」を据えられる度にくすぐったがったものだが、そんなに嫌いでもなかった。私はもうお灸を据えられる年でもなかったが、そのとき久し振りにその「お灸」を据えられたのであった。

青空文庫情報

底本：「落穂拾い・犬の生活」ちくま文庫、筑摩書房

2013（平成25）年3月10日第1刷発行

底本の親本：「小山清全集」筑摩書房

1999（平成11）年11月10日発行

初出：「文学界 第五卷第七号」文藝春秋

1951（昭和26）年7月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桜林 小山清

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>